

苦しみの所在

北 村 徹

奨励者紹介[きたむら・てつ]

同志社大学一神教学際研究センター特別研究員

同志社大学神学部嘱託講師

わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。
主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。
乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように
この人は主の前に育った。
見るべき面影はなく
輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、病を知っている。
彼はわたしたちに顔を隠し
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。
彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに
わたしたちは思っていた
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり
彼が打ち碎かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによって
わたしたちに平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

(イザヤ書 53章1―5節)

「古代イスラエル宗教史」

を教える難しさ

おはようございます。ただいまご紹介に与りました、北村と申します。本日、奨励を担当させていただきます。
簡単に自己紹介をさせていただきますと、このクラーク・チャペルの隣にある待辰館に設置されている一神

教学際研究センターで特別研究員を、そして嘱託講師として神学部で「古代イスラエル宗教史」のクラスを担当させていただいております。

この「古代イスラエル宗教史」は2017年から担当させていただいているクラスで、それ以前は同志社女子大学の中村信博先生が担当しておられました。「古代イスラエル宗教史」のクラスを担当させていただくに当たって、ヘブライ語聖書、キリスト教界で言うところの旧約聖書の内容、特にその歴史記述の性格を、どのように受講生にお伝えすればよいのかについて悩みました。いろいろな考え方があるかと存じますが、私の考えでは、聖書の内容をどのような立場から伝えるのかというのは非常に難しい問題だと思います。そもそも啓蒙主義に端を発する「宗教史」という学問は、教会の権威を支えるものとしての、「逐語靈感説」や「聖書無謬説」などに基づく絶対的な聖書理解を否定し、聖書が人の手によって書かれた歴史の産物であること、また、その宗教性が古代オリエントの諸宗教と連続性をもつものであることを示しました。それゆえ、ヘブライ語聖書固有の価値や意義をどのように提示するのかは、決して簡単なことでありません。加えて、このクラスが大学の授業であり、信仰を前提にはできないこと、そして授業担当者である私自身がクリスチャンではないことも、その難しさの程度を引き上げました。

私なりに伝え方を検討した結果、ヘブライ語聖書という書物の性格の、少なくともある側面をお伝えするための補助線として導入したのが、「君の名は。」というアニメの作品でした。

東日本大震災の記憶・

伝承としての

「君の名は。」

「君の名は。」については、大ヒットとなった作品ですから、耳にされた方、あるいは実際に観に行かれた方もおられるかもしれません。2016年8月に公開された、新海誠監督によるアニメーション映画で、日本国内での興行収入は250億円を超え、日本映画としては歴代2位、世界的にも大きな反響を呼び、全世界における約3・6億ドルという興行収入は日本映画のトップに位置します(2019年12月現在)。

映画の内容は、あえて言うならば、たわいもない恋愛ものです。1000年周期で地球に近づくティアマトという彗星の崩壊で生じた、彗星の一部の墜落によって飛騨地方の糸守という集落が破壊されるはずであったのに対し、糸守に住む女子高生と、東京に住む男子高生が、時間と空間を超えて入れ替わり、彼らを中心とする数人の高校生たちの活躍によって、その惨事が免れるというものです。このようなたわいもない恋愛映画であったにもかかわらず、国内外で大きな反響があった理由の一つには、そのことがそれを観る側に意識されるにしろ、あるいはされないにしろ、この作品が2011年の東日本大震災という出来事を受けて製作されたものであったことが、大きな意味をもっているように思われます。

新海監督は、2017年3月に放映されたTBSのインタビューで、東日本大震災からそれほど間を置かずに宮城県の名取市閼上(ゆりあげ)地区を訪れて、その惨状を目の当たりにしたことを述べています。そして、「君の名は。」という作品について、「強い想いで何かを取り戻す映画にしたかった」と述べ、また、「入れ替わる」というモチーフに関して、「自分がここにいたことが十分にあり得た」という実感から取り入れたと述べています。さらに、映画を含む物語の役割について、「共同体・村・人々が生き残っていくための教訓を含んでいる」と述べています。これらを私の言葉で少し言い換えますと、新海監督は津波によってもたらされた喪

失をそのままにしたいはなかったし、また、破局的な出来事を超えて、我々が生きていくための「何か」を含んだものとして、「君の名は。」という映画を製作しようとしたのだと言うことができます。

ここで少し個人的なことを述べさせていただきますと、私の母方の出身が宮城県の気仙沼市でありまして、震災直後、石油などの流出によって文字どおり火の海になっている気仙沼湾をTVで見た時には、本当に自分の目が信じられない思いでした。「てんでんこ」（津波が来たら、てんでばらばらにとにかく逃げろ）という言葉の存在に示されるように、三陸海岸は周期的に津波の大規模な被害に遭ってきたため、その対策は十分になされていたはずでした。たとえば、長さ2・4km、高さ10mの規模から「万里の長城」と呼ばれた、岩手県宮古市の防波堤などはその備えの代表でしたが、それにもかかわらず、死者・行方不明者を合わせて約2万人という被害が出たことは、現在の日本では考えられないことでした。

このような個人的な背景もありましたので、「君の名は。」という作品が、なぜそれほどまでに大きな反響をもち得たのかについて関心をもって検討したのですが、その中で見えてきたのは、その内容やテーマの根本的なレベルにおいて、ヘブライ語聖書、特に創世記冒頭の天地創造の物語とある程度重なる部分があるのではないかということでした。まず、その成立のきっかけですが、「君の名は。」が東日本大震災という破局的な出来事を受けて作成されたのに対して、ヘブライ語聖書もその形成に関して、ユダ王国がバビロニアによって破壊された「バビロン捕囚」という出来事が大きな意味をもったと考えられています。東日本大震災という大災害に応答する形で生み出された「君の名は。」という作品は、そもそも個人レベルではない、集合レベルでの災害や受難に応答した作品であるという意味において、ヘブライ語聖書との並行性が指摘できます。

また、彗星の名である「ティアマト」というのはバビロニアの創世神話の原初の女神であり、彼女がマルドゥクという別の神によって殺され、その身体が二つに裂かれて世界が創造されたと記されています。他方、創世記では冒頭に「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり」と記され、その後、神は「光と闇」を分けて昼と夜を、天の上下に水を分けたこと、地と海を分けたことなどが語られるのであり、「分ける」ということが世界の創造において重要な意味をもっています。「君の名は。」においても、先述のティアマト彗星が分かれて災害がもたらされるほか、この世に生を受ける際の臍の緒の切断など、「切断」というテーマが執拗にと言ってよいほど繰り返されます。この「分ける」「切断」というテーマについて、これは私の解釈になりますが、我々は根源的一体性から切り離された「個」としての存在であり、その象徴が個々人に与えられた「名前」であること、そして、個としてこの世に生きていることの中には、自らにとって「片割れ」とでも言うような、特別な誰かに逢うことができる喜びと、その誰かを喪うことの哀しみが表裏一体のこととして含まれている。自らにとって特別な意味をもつ、しかし同一の時空間では未だ逢ったことのない相手の名前を求め続ける「君の名は。」という作品の背後には、我々がこの世で生きていることについての、創世記にもつながるような根源的な認識があり、その認識が、ありふれた恋愛作品であるにもかかわらず、この作品に特別な深みを与えたのでないかと思うのです。この意味において、「君の名は。」という作品が生み出された契機とそれがもつ意味を考えることは、特に現在を生きる日本人にとって、ヘブライ語聖書の意味を考える上で大きな示唆を与えるものではないかと考えています。

「君の名は。」の

続編としての「天気の子」

この「君の名は。」の続編というべき新海監督の作品が、今年公開された「天気の子」です。「君の名は。」には及ばないものの、この2019年12月の時点で興行収入は130億円を超え、今年上映された映画ではNo.1となっています。雨が降り止まない異常気象の東京が舞台であり、陽菜（ひな）という女の子が主人公です。彼女は母親が入院している病室から降りしきる雨を眺めていた時、あるビルの屋上の一隅に陽が射しているのを目にします。そしてその屋上に赴き、そこにあった鳥居をくぐり、小さな社（やしろ）に祈りを捧げたことによって、短時間、局地的にはありますが、祈ると天気を晴れにできる能力を獲得します。彼女は15歳ですが、父親がおらず、母親もその後亡くなり、小学生低学年の幼い弟がいる家計を独りで支える必要性からマクドナルドなどでバイトをしていましたが、年齢詐称で解雇されます。そして、短期間で高収入を得るために、水商売もしくは風俗などの仕事に足を踏み入れようとしていたその間際、もう一人の主人公である帆高（ほたか）という16歳の家出少年によってそれを妨げられます。その後、彼らは「100パーセントの晴れ女」を謳い文句に、天気を晴れにする商売を始めたところ、その効力から反響を呼び、テレビで取り上げられるまでになります。しかし、陽菜の疲れもあり、一旦、その商売を止めることにします。

陽菜と帆高の話と平行して、「晴れ女」にまつわる伝説が紹介されます。「晴れ女」が「天気の巫女」として何百年も前から日本各地に存在してきたこと、そして、彼女たちが天と人々との間をつなぐ存在であり、最終的に彼女たちは「人柱」として自分の身を犠牲にすることによって、人々が望む天気をもたらす存在であることが語られます。事実、陽菜もまた、その力を使い過ぎて部分的に身体が透明になったり、空に浮き上がったりするようになっていたのです。

その頃、東京は夏でしたが、異常気象の程度が甚だしくなり、気温がぐんぐん下がって雨が雪に変わります。陽菜たち姉弟は未成年だけで生活していることが問題視されていて、児童相談所の職員によって自分たちが離れ離れになることに危機感をもったこと、また帆高はひょんなことで拳銃を手に入れてしまい、そのことで警察に追われる身になっていたことから、彼らは住处を後にして、雪の降りしきる東京の街を彷徨います。行き場のない中、なんとかラブホテルに泊まることになり、彼らは一息つきます。そのような中で、陽菜はすでに身体全体が透き通るような状態になっていたのですが、帆高に「晴れになったら嬉しいか」と尋ねます。帆高は天気のことなどどうでもよいから、君にいてほしいと応えるのですが、翌朝、目を覚ますと陽菜の姿は消えていました。空は真っ青に晴れ上がっていて、夏らしい陽気が戻り、気温も上がります。帆高は警察に捕まるのですが、脱走し、一度捨てた拳銃を再び手にして警察の追及をかわしながら、陽菜が晴れ女になった場所（ビルの屋上の小さな社）に赴いて、そこから陽菜がいるであろう空へと上がっていき、陽菜を地上に連れ戻します。しかし、陽菜を連れ戻した結果、再び雨が降り続き、東京は水没してしまいます。帆高は、自分たちは世界の形を変えてしまったのではないかと思い悩みながらも、大学進学を期に東京に戻り、陽菜と再会します。

「苦難の僕（しもべ）」と「天気の子」

先ほど、「君の名は。」と創世記との平行性について簡単に触れさせていただきました。それは、その共同体の存続自体が困難なほどの破局的な出来事に対する応答という共通性をもつがゆえに、その内容にもある程度の重複が認められるのではないかという指摘でした。「君の名は。」の続編というべき「天気の子」では、そのような共通性は認められるでしょうか。この奨励のタイトルとして付けさせていただいた「苦しみの所在」

をキーワードに、先ほど読んでいただいた聖書箇所、イザヤ書53章のいわゆる「苦難の僕」と、「天気の子」である陽菜との共通性、そして相違点を指摘したいと思います。

まず、両者の共通性ですが、個人レベルではない、共同体あるいは集合レベルでの災難が背景にあることを指摘したいと思います。「苦難の僕」では、バビロニアで捕囚の境遇にあった共同体とそこからの解放が見えてきた時代状況が、その記述の背景にあるとされています。他方、「天気の子」では、人間の活動がもたらした異常気象が背景となっています。

そして、共同体の集合的な平安のために、そこにあった集合的な問題性を集約して負わされ、その結果、自らには責のない受難を蒙る点が共通しています。たとえば、イザヤ書53章には次のように記されています。「彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに」（4節）、「彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」（5節）、「多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった」（12節）。陽菜もまた、彼女自身には何らの責もないにもかかわらず、15歳の年齢で、「短期間で高収入が得られる」道を選ばざるを得ない境遇に陥り、ついには、大人たちの活動によってもたらされた異常気象のツケを負わされる「人柱」とされそうになります。陽菜が人柱になると帆高が訴えたことに対してある登場人物は、彼は家出少年である帆高に比較的理解のある中年の男性ですが、「一人の犠牲でこの狂った天気が元に戻るならいいじゃないか」、さらに「みんなもそう考えるだろう」と述べるのです。

それから、共同体の成員、換言すれば「受益者」からそのことが認識されていない点についても共通性が指摘できます。イザヤ書では「わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と」（4節）、「彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを」（8節）と記されています。他方、陽菜については、帆高は家出少年であり、また拳銃を所持していたことによって、陽菜が消えた後、晴れ上がった空の下で警察に身柄を拘束されますが、その際、刑事に対して「（陽菜が）犠牲になったことを誰も知らない」と訴えます。そのような帆高に対して警察は、「精神鑑定を行いますか」というやり取りに示されるように、おかしいことを言っているとしか捉えないのです。

以上のような類似性がある一方で、両者には明確な相違点も認められます。相違点については受難を蒙る者がイザヤ書では男性であるのに対して、「天気の子」では未成年の女性である点など、重要と考えられる点はいくつもありますが、この奨励では、「受難に対する抗議の有無」という点にのみ、触れたいと思います。「苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった」（7節）と記されるように、イザヤ書では僕は黙って死んでいったことが記されます。他方、「天気の子」では、人柱になりそうになった陽菜に対して、帆高は空に上って、地上に連れ戻します。先にもお話したように、警察とのやりとりはこの作品の一つのポイントですが、警察が共同体を、より正確には共同体の平安を目に見える形で守る存在であるとすれば、共同体を目に見えないレベルで支えるべく人柱となった陽菜の重要性を訴えるべき相手として、警察はこれ以上ないほど適切な対象であると言えるでしょう。警察との攻防は、この作品のハイライトと言えるかと思います。

帆高はまた、陽菜を地上に戻す際に、「この世界なんかどうなってもいい、ただ君と一緒にいたい」と陽菜に言いますが、このような帆高のアナーキーな側面は、体制に対するプロテストとして捉えることができます。帆高の言動に対して、「無責任ではないか」「自分たちさえよければ、それでよいのか」という批判もあり得る

かもしれません。しかし、そもそも雨が降り続ける世界を生み出し、そのツケを（自覚もなく）15歳の少女に押し付けようとしている大人たちの方が無責任ではないか、そしてそのような状況は今、この世界において実際にあるのではないか、というのが新海監督の主張ではないかと思うのです。

以上、新海監督の最新作である「天気の子」の陽菜という15歳の少女について、「苦しみの所在」という観点から、イザヤ書53章の「苦難の僕」と重ねて考えてきました。私が指摘させていただいた「君の名は。」そして「天気の子」と、ヘブライ語聖書との間に類似性が認められるとするならば、それはヘブライ語聖書成立のコンテキストと、今、我々が生きている状況との並行性や類似性にこそ、その原因が求められるのではないのでしょうか。地震や津波、そして台風や大雨に示されるような集合的な困難は、残念ながら今後も継続していく可能性が高いと言わざるを得ません。そのような困難な状況の中で、我々が我々の平安を求めることに付随して、集合的な苦しみが誰かに負わされるということも生じてくるのではないのでしょうか。

「天気の子」の副題は「Weathering With You」というもので、それは、「あなたと共に切り抜けていく」とを意味します。帆高は狂った世界のツケを陽菜一人に負わせるのではなく、この狂った世界を彼女と共に切り抜けていくことを選びました。この世界を支えているのかもしれない苦しみの所在を覚えること、そして、「みんなのために」というような美名のもと、それを誰かに押し付けないこと、それは聖書が記された時代、また現代を生きる我々においても重要であり、時代を超えて我々が意識しておく必要性のあるテーマなのではないのでしょうか。聖書とアニメを同一線上で語ったことについて不快に思われた方がおられたかもしれませんが。また、アニメの絵空事を真に受ける必要もないのかもしれません。しかし、時代や場所、媒体の種類を超えて、同じような重みをもった響きが通奏低音として、我々がこの世界に生きていることの内に流れているような気がします。

以上をもちまして、私からの奨励を終えさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

2019年12月4日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録

<HP では傍点等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集〇〇号』をご覧ください。>